

防災道德教育に ベストを尽くして天命を待つ

鎌田修広 (株)タフ・ジャパン代表

本稿は、平成三十年十一月十六日、東日本生涯学習センターでの公開講話の要旨に加筆されたものです。



昭和44年(1969)、神奈川県生まれ。日本体育大学体育学部社会体育学科卒業。在学中にはトリアスロン部を創設し、初代主将を務める。平成5年、政令指定都市の消防局へ入局。14年、消防訓練センターの体育訓練担当教官となり、消防庁消防大学校で消防体育訓練の講師を現在も務める。23年に退職し、防災研修や人材育成等を行う株式会社タフ・ジャパンを設立、代表取締役となる。著書に、『防災筋肉』『消防メンタル』(イカロス出版)がある。

本日の演題は、「防災道德教育にベストを尽くして天命を待つ」です。人と関わるなかでの気づきから、「防災」「減災」に対する意識を高め、「大切な人やモノを守りたいという利他的なエネルギーを活用し、自ら率先して行動を起こすことで、災害時の生存率を一パーセントでも高めていこう」とすることが、私が追求している「防災道德教育」です。

今日は、完全参加型で行います。途中、お隣の方とペアになって、お話し合いたただくことがあります。よろしくお願いします。

消防局を四十二歳で退職して起業

私は、平成五年、政令指定都市の消防局に入り、十四年には念願叶って消防訓練センターの体育訓練担当教官となりました。その後、消防庁消防大学校で消防体育訓練の講師となり、平

成二十三年度末で退職。実は退職届を提出した四日後の三月十一日、東日本大震災が起きたのです。日本中が混乱している中で苦渋の決断でしたが、退職後はそれまで十八年間消防士として学んだ知識や技術を生かした、災害に強い「災強人材育成」で日本の備えに貢献し、タフ・ジャパンの実現を目指し、平成二十三年五月六日、妻の誕生日に株タフ・ジャパンを設立しました。妻は看護師でしたが、当時妊娠がわかっていましたので、私は自分を追い込むためにあえて逃げ道を断ち、第二の人生を覚悟を決めて歩み始めることができました。

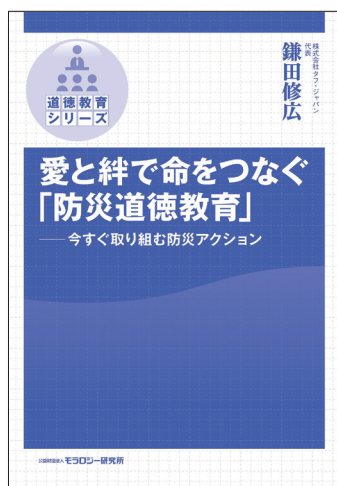
「ちゃんと備えてドンと構える」

はじめに、消防の世界で学んだことについて、お話ししたいと思います。会社には社訓が、学校には校訓があるように、消防の世界にも、「消

防精神」があります。

九州・福岡の消防学校を訪れたとき、敷地内に「消防精神」という漢詩(作者・松口月城氏の石碑が建っていました。漢詩の大意は、次のようなものです。

「天が裂けようと地が崩れようと、驚くことはない。猛火にも洪水にも、何をためらうものか。われわれ消防の使命は、このようなときにある。弱きを助けるためには、命をも惜し



愛と絆で命をつなぐ「防災道德教育」
—今すぐ取り組む防災アクション—
(道德教育シリーズ)(モラロジー研究所刊)
発行日：平成30年3月11日



「消防精神」の石碑

まない覚悟で身を挺するのだ。勇敢にして、物事に動じることなく、機敏に行動すること。こうして消防の大神を發揮するのだ。もう少しかみ砕いた言い方をしますと、「ちゃんと備えてドンと構える。いざというときには勇敢に闘え」ということです。

また、日本全国の消防職員数より消防団員数のほうが五倍以上も多く、職団員を合わせると約百万人もいて世界でも類を見ない地域防災力ですが、有事の際に縁の下の方力持ちとなつて郷土を守り続けてくださる消防団員は「義勇消防」と言われ、正義と勇気を併せ持つ「備え」の象徴であり、日本を守る「守護神」なのです。

備えずに後悔されているお手紙の存在

古代中国から日本に伝わった有名な言葉の一つに「備えあれば憂いなし」があります。全文は「居安思危 思則有備 有備無患」と書かれていて、平和な今だからこそ、危険（災害）

のことを心に思い浮かべなさい。そうすれば備えがわかり、備えることで心配がなくなります。とのことですが、わかっているにもかかわらず行動に移せないのが現実ではないでしょうか。だからこそ内閣府の「一日前プロジェクト」のホームページがあるのです。「もし災害の一日前に戻れるとしたら、あなたは何をしますか」という問いから、被災者の体験談を集めたページです。先延ばしにして備えていなかった反省や後悔が数多く綴られています。

さらに「後悔の念」等を少しでも和らげるために、「漂流郵便局」という場所があるのをご存知でしょうか。香川県の栗島にある「漂流郵便局」には、届けたくても届けられない手紙が全国各地から届くのです。一度訪問し、半日かけて数百通に目を通したところ、手紙の宛て先は故人や未来の子孫、思いを伝えることのできなかった初恋の人、自分、長年の愛用品などさまざまでしたが、特に故人宛ての手紙が多く、中には災害時も含めてちゃんと備えていなかったことに對するやりきれない気持ちの詳細に綴られていたのです。「○○ちゃん、ごめんね。お母さんがちゃんとしておけばよかった。本当にごめんね……」。私は室内に置いてあるティッシュを手放すことができないくらい涙が溢れ続け、このようなお手紙が一枚でも少なくなるよう決意を新たに、フェリーで島を後にしました。

米国のベストセラー防災書に学ぶ

NASA(米国航空宇宙局)の工学博士・アーサー・T・ブラッドレー氏による『自分と家族を守る防災ハンドブック』(日本語版・楽工社刊)という本があります。米国内で大反響を呼び、ベストセラーになった防災書です。自然災害から疫病、人災、戦争・テロなど、さまざまなレベルの「災害」に共通して必要な「モノ・知識・技術」について科学的に解説されています。さらに、著者自身の信念は「防災は恐怖や強迫観念ではなく、愛情と配慮を動機として取り組むべき」であるとのことでした。これには大変感銘を受けました。人は脅かして動かすものではなく、やはり愛情とか配慮がなくては実効性に欠けるのだということがわかり、共感を覚えるとともにストンと腑に落ちた瞬間でした。

防災×道徳教育

平成七年(一九九五)一月十七日に発生した阪神・淡路大震災の震源地に近い町として知られる淡路島の北淡町(現・淡路市)を、退職直前に訪ねました。理由は、北淡町の謎を突き止めるためです。謎とはなんだと思いますか。そこは全世帯の六割が全半壊し、三百人が生き埋めになりながら、そのほとんどが地元消防団を中心とした住民の協力で素早く救助された地域であ

り、町の人たちの間に、お互いの家族構成はもちろんのこと、「どこに誰が寝ているか」までを知るほどの絆があったそうです。しかし、「なぜそのような絆が結べたのか」という疑問が私の中でくすぶっていました。

車で北淡町にさしかかるなり私の目に飛び込んできたのは、「道徳教育推進の町」という看板でした。この町では、生命の尊さや助け合いについての教育が重視されていたのです。自分の探し求めていたものは、まさに「これだ」と直感しました。その日を境に「防災」は「道徳教育」とセットなのだという確信が生まれ、二つを合わせることにより、さまざまな相乗効果が期待できるので、ここで初めて「道徳」が、私の中に確固たる存在として位置づけられました。

防災意識の高い地域は、例外なく住民同士が強い絆で結ばれています。この「絆」を支えるのが、自分の生命を大切にすると同じように隣近所の人たちの生命も大切に思う「道徳心」であり、文化として根付いているのです。災害に強い「災強」の町づくりを実現していくうえで、核となるものは「道徳」だったのです。

防災・減災を因数分解すると「愛の見える化」に行き着いた

「防災」をゆっくり言う「ほおーうーさあーい」ですね。「減災」もゆっくり言う「げえー

んーさあーい」です。実は両者とも、小さな「あい（愛）」が隠れていることに気がつかれましたか。この「愛」が私の考える「防災道徳教育」の最終形なのです。「防災道徳教育」では、これを「家族愛」「隣人愛」「郷土愛」として捉えることにしています。そして、この三つの「愛」をどれだけ「見える化」していくかというのが、私の究極の目標です。

共に生きるために必要なこと①——家族愛

家族愛の見える化は、まず、一人暮らしの母との連絡です。見守り携帯により毎朝九時になると母から電話がきます。この時間がかかり遅れたりすると、姉と私と妻の誰か一人から確認の電話を入れ、母につながらなければ、両隣の家に電話をかけ、それでもつながらなければ、民生委員に連絡して見に行ってもらいます。一番の心配事なので、皆で見守る仕組みを十年以上継続しているのです。

さらに私の家は、江の島に近い湘南海岸から約四〇〇メートルほどの距離にある五階建てマンションの四階にあり、海拔十五メートルの高さです。私は全国各地に出張が多く不在がちです。妻と子供を含めた家族全員分のライフジャケットを寝室に用意しています。東日本大震災を教訓に、「何かあったらこれを着て五階、さらには屋上に逃げてくれ」と伝えてあります。

最悪を想定し、万が一のことがあったら、個人情報入りのホイッスルを携帯してあるので遺体となっても早く対面できる可能性があるということです。

このように、日頃から少しでも不安や心配に思ったにことに対しては、「見える化して備える」という行動を起こすように心がけています。心配を抱えながら、何もしなければ、もしもの事態に直面したときに生き残る確率は上がりませんし、後悔しか残らないからです。

共に生きるために必要なこと②——隣人愛

専門家がおススメしている究極の備えは、「顔の見える関係を構築すること」です。それさえあれば何もいらなくとも言われています。「減災コミュニティ」こそ最大の備えであり、①会釈から始まる、②おすそ分けをする関係に発展させる、③最終目標は鍵を預ける、の三ステップになっています。私も母が住むマンションの鍵を顔見知りである民生委員さんに預けていることで、どれだけ安心して日々を過ごせているか。

また、仕事で関わらせていただいた保育園と自治会でも約二〇メートルしか離れていないお互いの防災倉庫の鍵を預け合うことで、日頃から訓練まで一緒に行うようになりました。予算は少なくとも合鍵だけを作れば使えるものが倍



地域住民が一つ屋根の下に集う「だいかぞくんれん」

に増えるとい
う知恵であ
り、結果、日
頃から「向う
三軒両隣」の
隣人としてつ
ながろうと意
識し始めたそ
うです。

次に、私の住むマンションで最初に行ったのは、備品や設備はどうなっているのか、みんなで探検しようということでしたが、最後管理費を払ってがやってくれては自主防災なの現実を目の当

出し合った結果、家具の手前に差し込む転倒防止版を二百個用意し、地域の小学校の子どもたちの道德の時間に「おじいちゃん、おばあちゃんと共に生きるための一言」をお願いしたところ、「地震でもこれで踏ん張って」とか、「一緒に身を守り長生きしましょう」と書いてくれたのです。商品が息を吹き込まれたものになり、さらに「本日であれば取付のサポートも行います」とご案内したところ、なんと、その日のうちに七割の方が取付て報告までしてくれたのです。完璧な固定を目指さず、避難する時間を確保することを目的にした愛情や配慮が人の心を動かし、行動に繋がった忘れない事案の一つです。

できるまでになりました。今では懸案事項であった「津波避難ビル」として市から認定されるなど、多くの見える化が実現し、当時空っぽだった防災倉庫はたいへん充実しております。

起業して数年後、こんなこともありました。あるマンモス団地の防災担当者から、「一人暮らしの高齢者に家具の転倒防止を促したい」と相談を受けました。皆さん何を買っていいかわからないし、固定するが大変なのです。知恵を出し合った結果、家具の手前に差し込む転倒防止版を二百個用意し、地域の小学校の子どもたちと共に生きるための一言をお願いしたところ、「地震でもこれで踏ん張って」とか、「一緒に身を守り長生きしましょう」と書いてくれたのです。商品が息を吹き込まれたものになり、さらに「本日であれば取付のサポートも行います」とご案内したところ、なんと、その日のうちに七割の方が取付て報告までしてくれたのです。完璧な固定を目指さず、避難する時間を確保することを目的にした愛情や配慮が人の心を動かし、行動に繋がった忘れない事案の一つです。

共に生きるために必要なこと③——**郷土愛**

生まれ故郷に対して郷土愛をお持ちの方は多くいると思います。郷土は、手の届く範囲の一

共に生きるために必要なこと③——郷土愛

生まれ故郷に対して郷土愛をお持ちの方は多くいると思います。郷土は、手の届く範囲の一

番大きな運命共同体かもしれません。

私の生まれ育った横浜市鶴見区で、数年前に区長さんから危機管理担当者を介して全職員五〇〇人を対象とした防災道徳教育の依頼を受けました。教育が終わり、早速、見える化してくださったのが一日分の食料と水が入った「鶴見区」と書かれたウエストポーチの購入です。これを全職員が椅子の後ろにかけて毎日区民対応をしているのです。大規模災害が発生した時には、三日間拘束されて家に帰れない方々なので、初動体制として、区民のために全力を注げるよう最初の一日分をウエストポーチに常備し、安全・安心を確保しているのです。

次に、私が今住んでいる地域での事例ですが、海から近いので「海拔何メートル」という表示がたくさんあります。しかし、この表示がいくらあったところで、いざというとき人は動けません。私はずっと疑問に思い改善案を訴えていました。そしたら市会議員で消防団の方が「たしかに、そのとおりだね」と関係団体に働きかけてくださり、三年後、「津波避難道路標示」を二百カ所設置することができました。ここから、右側に何メートル行けば高台や津波避難ビルがありますという表示なので、土地勘が無い観光客でも行動できるのです。元消防人×現消防団の情熱の掛け算が見える化を実現させてくれました。

ところで皆さんの地域では、総合防災訓練を行っているのでしょうか。大勢の方が集まり、毎年同じような訓練をしてマンネリ化が叫ばれています。私たちの地域も同様でしたので、工夫をしてみました。通常の訓練後、一時間ほどの時間をいただき、体育館で「だいかぞくみんな」を企画しました。一つ屋根の下で大きな家族になり避難所運営の訓練をしたのです。最初の年は三十人でした。二年目は五十人。三年目は大学生のおかげで百人集まりました。実は訓練を通じて人と知り合うことをお土産にしたかったのです。訓練に参加することにより、新たな知り合いが増える仕掛けをつくったところ、四年目には三百人を達成し、五年目にはついに四百人を超えたのです。皆さん、どこかでつながることを望んでいたのですね。

「平成の強力」の復活

私が今、人生をかけてチャレンジしている「江の島強力プロジェクト」についてお話ししたいと思います。

強力とは運び屋のことです。昔は「気は優しくて力持ち」という、おもてなしの象徴でした。日本一の富士山に登るため、強力のを借りて荷物を民宿に届けてもらい登山を楽しむ方が多くいた時代、「富士山一の名強力」と呼ばれた小宮山正さんは、百八十キログラムの石を背負っ

て登山したことで知られています。

私の住んでいる近くにある江の島は、二〇二〇年の東京オリンピック・パラリンピックのセーリング会場となることが決定していますが、完全バリアフリーにはなっていないため、地震による津波警報等が発令された場合、車いす利用者は、自力での避難が困難な状況です。

歴史を紐解くと江の島にもその昔、三人の強力が実在していたことが明らかになったため、平成二十九年（二〇一七）十一月五日の「津波防災の日（世界津波の日）」に「平成の強力」復活の狼煙を上げました。荷物を運ぶのではなく、人の生命を通じて夢や希望を運ぶことをあらたな価値観に加え、車いす利用者の方を人力で江の島の頂上に搬送する方法を検証するブレ企画を実現したのです。その後も多くの関係団体のご協力により実績を積み重ね、二〇一九年度には、なんと地元の行政と協働事業として一年間活動することが決定しました。「未来のために誰かが



牽引式車いす補助装置で江の島頂上の広域避難場所へ

やらなければならぬのであれば、みずから手を挙げてその誰かになってみる！」という覚悟で、最終的には地元の方々が望んでいるように文化として根ざすまで諦めずに取り組んでいます。（参考動画：YouTube「江の島強力プロジェクト」）

残された人生を本物として生きる

元消防士である私は、東日本大震災以降、現在まで、東京大学の精神保健学チームの一員として、震災で一番多くの団員が亡くなられた地域の消防団関係者に対し、微力ながらサポートをさせていただいておりますが、当時の団長から言われた言葉が、今でも鮮明に頭に残っています。

「おい、鎌田。生き残った者はおまえたちを含め、今後の人生を本物として生きろ！」。そう言い残して、震災の二年後に、五十六歳の若さでお亡くなりになりました。柔道で鍛えた屈強な身体は、最後まで勇敢に病と闘い続け、私たちに「家族愛」「隣人愛」「郷土愛」という、生きるために必要なエネルギーを注入してくれたのです。

私は、元消防士として、団長のお言葉の通り、残された人生を本物として生きるために、防災道徳教育のタネを全国にまき続けて、それが実るまで信じて行動し続けることをここに誓います。